

2016. 7. 20

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 27

目次

1)巻頭言 熊本地震という試練 (支部長: 池田理知子)

2)今年度の支部活動予定 (支部大会実行委員長・紀要担当運営委員: 平野順也)

- ①秋の支部大会の内容について
- ②紀要 14 号の経過報告

3)会員からのメッセージ

- ①ハワイからの報告 (福岡教育大学 吉武正樹)
- ②私の現在の研究テーマ (西南学院大学 清宮徹)

4)学会会員の出版図書の紹介

五十嵐紀子・伊勢みずほ著 『がん、のち晴れ』 (日本文理大学 清水孝子)

5)支部会員の紹介

- ①新支部会員 (長崎女子短期大学 江頭万里子)
- ②新支部会員 (日本大学 山上登美子)
- ③所属の異動 (久留米工業高等専門学校 横溝彰彦)

6)編集後記

1) 巻頭言

熊本地震という試練

支部長：池田 理知子（国際基督教大学）

2016年4月14日と16日に熊本を襲った震度7の地震は、九州支部にも少なからぬ影響を与えました。まず、今年度の支部大会開催地である熊本大学の平野順也先生のご心労は想像を絶するものがあったのではないかと推察いたします。先の見えない混乱のなか、平野先生ご本人を含め多くの方が熊本での支部大会の開催を危ぶまれたのではないのでしょうか。しばらくしてご本人から当初予定されていた10月22日に開催しますとの連絡をもらい、ほっとすると同時に、こういう時期だからこそ皆で協力して大会を成功させなければと改めて思いました。皆様のご協力をぜひお願いいたします。

また、平野先生は今年度の大会実行委員長であると同時に、九州ジャーナルの編集長でもあります。こちらも予定通り9月発行で準備を進めるとの返事をいただいております。投稿・執筆にご協力いただいている先生方には引き続き平野先生へのお力添えをお願いいたします。

私からの義捐金募集の呼びかけに対して、多くの方からのご協力も得ることができましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。ここで、その後の報告させていただきたいと思っております。集まりました義捐金の総額は

122,000円でした。それを半々にして（振込手数料を引いた額）、熊本大学は平野先生、熊本学園大学は花田昌宜先生を通して、それぞれの大学に避難していた方々の生活支援に当てていただくために指定された口座にお送りしました。なお、花田先生は当学会員ではありませんが、熊本学園大の避難所の開設・運営に積極的にかかわっておられ、昨年の支部大会では会場を貸していただくなど、たいへんお世話になった熊本学園大学水俣学研究センターのセンター長です。

今回の支部の活動を通して感じたのは、人とのつながりの大切さです。50名ほどいる九州支部のメンバーと一堂に会する機会はありませんが、お互いにどこかで支え合っているのだということを今回の経験を通して実感しました。繰り返しになりますが、皆様本当にありがとうございました。熊本ではいままも余震が続いています。また、あまり報道されませんが、清水孝子先生のご自宅でも被害があったように、大分での余震も心配です。まだまだ予断を許さない状況が続きますが、皆で一つひとつ乗り越えていきましょう。

2)今年度の支部活動予定

秋の支部大会、紀要 14 号

支部大会実行委員長・紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

①秋の支部大会の内容について

第 23 回日本コミュニケーション学会九州支部大会を「記憶と未来：71 年目からの戦争史」をテーマに 10 月 22 日（土）に熊本大学にて開催いたします。

4 月 14 日に発生した 2 度の大地震がもたらした未曾有の被害や続く地震活動を懸念し、開催場所および日時の再調整も話し合われましたが、すべて変更することなく熊本大学で行います。決して参加される方々の安全確保を軽視しているわけではございません。益城町や阿蘇地方では地震が残した傷跡が生々しく残っており、復興の兆しも実感できないのが現状です。熊本市内は比較的「軽度」であるものの、倒壊した家屋、閉店を余儀なくされた店舗など地震の脅威が散見される状況です。熊本は深く傷つきました。しかし、復旧・復興に向けて着実に一歩、一歩と未来に向けて足を進めはじめたことも確かです。「傷ついた」熊本で支部大会を

計画通りに開催できることに誇りを感じております。

今年度支部大会は従来どおり、前半を研究発表、そして後半を基調講演という 2 部構成で開催します。午後の部は太平洋戦争時の遺跡を調査している「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」事務局長 高谷和生氏をお招きし、基調講演を行っていただく予定です。8 月 1 日まで、研究発表の申込みを受け付けます。日本コミュニケーション学会会員であれば、九州支部以外に所属されている方も発表することが可能です。

また、若手研究者育成を目的とし、九州支部所属の大学院生が発表する場合には補助金が給付されます。この機会を積極的に活用して、研究者として成就するための足掛けとしてください。

2016（平成 28）年度 第 23 回支部大会

1. 日時：2016 年 10 月 22 日（土）
2. 場所：熊本大学 全学教育棟
3. 大会テーマ：「記憶と未来：71 年目からの戦争史」
4. 大会実行委員長：平野順也

● 研究発表者を募集します ●

研究発表の申込み締切：8 月 1 日（月）

* 大学院生の研究発表に対しては補助金を給付します。

②紀要 14 号の経過報告

『九州コミュニケーション研究 第 14 号』の経過報告をさせていただきます。現在、9月 30 日（金）発行に向けて作業をすすめています。2 度の募集の結果、3 本の論文の投稿がありました。我々が没入する研究とは長時間独居を課される非常に孤独で寂しい活動であるともいえます。このような過程を経て熟成された先生方の知見を、公的に発表する場として『九州コミュニケーション研究』を選択していただいたことにたいし、投稿していただいた先生方には心より感謝申し上げます。また、査読を担当していただく先生方、このたびは無理なお願いにもかかわらずご協力いただき、ありがとうございました。

『九州コミュニケーション研究 第 14 号』は投稿論文だけではなく、第 22 回九州支部大会が開催された水俣についての特別企画を掲載する予定です。エコネットみなまた代表理事・山下善寛氏の基調講演や語り部・南アユ子氏へのインタビューをはじめ、水俣病資料館といった水俣ツアーで訪れた数々の場所に刻まれた「記憶」について、数名の先生方から寄稿していただきます。私が担当者になってから発行する最初の紀要になりますが、少しでも充実した内容をご用意できるように取り組んでいく所存です。そのため多くの先生方のお手を煩わせることとなりますが、ご支援のほどどうぞよろしくお願いいたします。

3) 会員からのメッセージ

① ハワイからの報告：Smith 氏との「再会」

吉武 正樹（福岡教育大学、ハワイ大学客員研究員）



ハワイ大学マノア校での1年間のサバティカル研究のため、2015年10月より家族でハワイ州ホノルルに来ている。遡ること20年前の1996年夏。修士課程を終え帰国の途にあった私は、初めてこの常夏の島に足を踏み入れた。ハワイ大学に隣接する East West Center で開催される異文化セミナーへの参加が主たる目的だった。しかし、私にはもう一つハワイに立ち寄る理由があった。当時、どうしても会っておきたい人がいたのだ。その東西センターに。

Larry E. Smith 氏。1970年代半ばにして英語教育におけるネイティブ・モデルに疑問を呈し、国際コミュニケーションを重視した枠組みを提唱した、「国際英語（English as an international language）」の先駆者だ。修士課程を終えたばかりの私には、「これからの英語教育には国際英語の視点が必要だ」という直感があった（帰国後、その直感津田幸男先生の『英語支配の構造』で見事に打ち砕かれ、相対化されるのだが）。私にとってハワイは、何よりも「スミス氏のいるハワイ」であった。

到着後無事にお会いする約束にこぎつけた。当日、期待と緊張を胸にドアをノック。氏は爽やかな笑顔で私を迎え、力強く握手した。そのときの感触は今も私の右手に残っている。正直、何を話したかは記憶にないが、「朗らかかつインテリジェント」という第一印象は今となっても変わらず、以来私にとってスミス氏は「ジェントルマン」の代名詞であり続けている。その後も、ホノルルにあった氏の会社のオフィス、熊本、長崎でお会いする機会を得、特に長崎では妻子を紹介することもできた。

今回研究先としてハワイ大学を選ぶ際も、ラリー・スミス氏の存在は大きかった。初めて家族で海外に住むとなると、頼りになる方がいる方が心強い。申請の半年前のハワイ旅行では互いのスケジュールが合わず、残念ながら電話のみの会話となったが、ハワイ大学での研究の可能性や現地の小学校事情の情報をいただいた。その後も引き続き、メールにて親身に相談に乗っていただき、行き先をハワイ大学に決めた。

2014年11月、サバティカル研究の内諾が学

内で降りた。スミス氏への報告にむけ公式な承認を待っていた矢先、訃報が飛び込んできた。同じ年の12月13日、氏が出張先のインドで急逝されたのだ。私たち家族は大きな後ろ盾を失うとともに、突然の悲報に心を痛めた。

「スミス氏なきハワイ」に来て10ヶ月。寂しさが残る一方、氏が残してくれた宝物もある。受け入れ教員のGraham Crookes氏との出会いだ。「Department of Second Language Studies なら学部長が知り合いだから、連絡を取ってみるといい」と紹介されたのが、同学部教授のクルックス氏だった。調べてみると、言語教育における批判的教育学（Critical Pedagogy）を専門とする、偶然にも私の研究テーマに「ドストライク」の方だった。素性も知らない私を、「スミス氏と共通の知り合い」として快く迎えてくれたクルックス氏とのご縁は、まさしく不在のスミス氏が私に残してくれた「形見」である。現在私たちは共同研究を進め、共著の論文を数本執筆中である。

2016年7月8日、東西センターにてラリー・スミス氏の生涯と功績を記念したシンポジウムが開催された。この原稿と向き合っている、まさに今日の話だ。この企画のために集まった、World Englishes の学会やジャーナルをともに立ち上げた1978年以来の同志、氏の教え子、ご親族らとともに氏を偲ぶ、特別な一日となった。帰宅後も心ここにあらず、深夜一人ホノルルの夜景をぼんやりと眺めながら、氏の秘話のことを思い出している。

奥様によると、スミス氏は最後まで博士号をあえて取得せず、名誉博士の話も拒み続けられたという。自身の「authoritative (!?)」な性格とのバランスをとり、学問知に囚われることなく常に心を開き、現場の方々の経験知への敬意と共感を忘れないためだったのではないか、というお話だった。

さて、私はどうだろう。博士号取得の道のは私を成長させたものの、確かにその旅の「お供」は主として書物。そこに日常を生きる人々の表情、血の通った身体は不在だったかもしれない。以前の私は今より、人種や国境を越えて人と関わり、学びの機会があるところに足を運び、顔を出し、五感を使ってあらゆる刺激を吸収していたように思う。それが、ゲームに没頭する人のように学問にいそむうちに、私は脳と身体のバランスを崩し、書物の世界に安住してしまっていたのではないか。

ハワイという土地は、身も心も開放的だ。スミス氏のプロとしてのこだわりの話は、そんな無防備だった私の心にチクリと刺さった。ジェントルマンだった氏との出会いは、いつも握手からだった。これからは、右手に残るぎゅっとした握手の力強さより、心に刺さったこの棘を思い出さだろう。そして「再会」のたびに対話しながら、「大人」そして「プロ」としての自分の立ち位置や姿勢を省みるのだろう。As ever（これからもかわらず）。ラリー・スミス氏が手紙の最後、好んで使った言葉である。

3) 会員からのメッセージ

② 私の現在の研究テーマ： 批判的組織コミュニケーションとディスコース

清宮 徹（西南学院大学）

西南学院大学に所属する清宮です。日本コミュニケーション学会に参加したのは2010年からで、まだまだ浅い歴史です。しかしその間、大会実行委員長や年次大会担当理事、事務局長を担当し、密度の濃い学会活動でした。私の専門は、組織コミュニケーション (Organizational Communication: OC) です。アメリカには多くの研究者がいるのですが、日本ではあまり活発な領域ではないと思います。OCは、経営学の組織論、産業組織心理学や組織社会学と境界を接する学際的研究領域です。OCは一般的に、民間企業を研究対象にしますが、医療組織や公的な組織、コミュニティーなど研究対象も多様化しています。私自身、近年は医療組織と介護組織の研究に従事しています。

OC研究には、組織の内的コミュニケーションに焦点を当て、上司と部下の関係、例えばリーダーシップや意思決定、そのほかにもコンフリクト、交渉など幅広いテーマがあります。またコーポレート・コミュニケーションやテクノロジーという領域もあり、組織とその外部とのコミュニケーションに焦点を当てた情報共有、ステークホルダーとのコミュニケーション、ブランディングやアイデンティティ、危機管理などの研究領域も活発です。

そこで私の研究ですが、簡単に言うと、批判

的組織コミュニケーション研究ということができると思います。私の研究視座は、M・フーコーやE・ラクラウなどのポスト構造主義やポストモダニズムの強い影響下にある Critical Management Studies というヨーロッパ経営組織論と大きく関係しています。したがって、経営学の主流派があまり議論しないような組織とパワーの関係などを批判的に研究します。とくに組織が無自覚に陥っている経営主義 (managerialism) について、批判的考察を行います。例えば、この観点から私は組織不祥事について研究してきました。2001年にアメリカから帰国すると、日本の産業社会は不祥事の嵐が吹き荒れていました。三菱自動車のリコール隠しや雪印食品の牛肉偽装など、日本の経済界が不祥事に震撼していたころです。産業界では不祥事を企業倫理のmatterとしてコンプライアンスを強調したり、危機管理のmatterとしてガバナンスなど監視機能の強化に乗り出しました。しかし2016年の三菱自動車の燃費データ改ざん事件に見るように、不祥事は一方向に無くなりません。不祥事(とくに偽装やデータ改ざんなどの組織的な情報操作)は単に経営の失策やエラーではなく、また倫理感に欠ける社員の不徳の行為という議論では理解できないのであります。これは資本主義組織における経

営主義の必然的現象であり、とくに資本主義社会における商品的言説の転倒性と関係すると考えます。そしてこの商品(化)的言説は、現代の多くの社会生活と経営組織に根付いており、私の研究の焦点はこれを脱構築していくことにあります。

私にはまた、組織ディスコース研究(ODS)という、もう一つの柱があります。コミュニケーション学の研究領域では、対話や語りに注目するディスコース的アプローチは一般的ですが、経営組織の研究領域では、これまであまり注目されてきませんでした。イギリスでの在外研究中にこのアプローチと出会い、多様なディスコース分析を組織研究の領域で展開しようと試みています。いま取り組んでいるプロジェクトは、東日本大震災の被災地である南三陸町でのフィールドワークで、被災地の多様なディスコースを収集し分析することです。これまで4年間、南三陸町を訪問しながら、現地の商店街や、漁業関係者、仮設住宅の住民(おばあちゃんたち)と対話を続けながら、被災直後から復興に向けての多様なディスコースの相互言説性につい

て考察しています。災害復興の場面で、レジリエンスという言葉が近年頻りに耳にします。この言葉は「弾性」という元に戻ることを意味しますが、被災地は津波に襲われる以前の元の街に戻るのではなく、多くの協同と感謝に基づいた新しいコミュニティを作り出そうと努力しています。そしてこれは被災地だけの問題ではなく、過疎や高齢化、シャッター商店街という問題を抱える日本すべてに通じる課題なのです。地震と津波によって失った日常を回復し新たなコミュニティを創設するプロセスは、とても多くの学びと示唆に富むダイナミックな組織化のプロセスとみることができます。とくに危機におけるマーケット言説とコミュニティ言説の葛藤に注目し、地域的な格差を生みはじめた復興のディスコースについて分析しています。

このような私の研究について、ご意見やアドバイスをいただければ幸いです。また、ご関心のある方は、ぜひお声掛けください。ご一緒に共同研究できれば幸いです。

4)学会会員の出版図書の紹介

五十嵐紀子・伊勢みずほ著 (2015、新潟日報事業社) 『“がん” のち、晴れ』

清水 孝子 (日本文理大学)

がんを体験した女性たちからのメッセージ ～「キャンサーギフト」という生き方～

池田支部長より1冊の本『“がん” のち、晴れ』を紹介された。著者名に東北支部の五十嵐紀子先生の名前を見つけ、即、アマゾンで注文。一気に読んだ。カバーの表紙はいつもの笑顔の和服姿の五十嵐先生と新潟でフリーアナウンサーとして活躍されている伊勢みずほさんの笑顔の写真が並んでいる。本書は、共に30代で“がん” 宣告を受けたお二人が、前半部ではモノログ形式で自らの“がん” 闘病を語り、後半部ではダイアログ形式で共に“がん” を語り合うという構成だ。

五十嵐先生は2008年10月に乳がんと診断されてから、本書出版まで病気のことを余り語ることはなかった。2015年1月の伊勢さんとの出会いが本書誕生のきっかけになったという。そして、2015年9月に二人で参加した、「リレー・フォー・ライフ (命のリレー)」(がん患者や支援者が24時間歩き続けるチャリティーイベント)で、五十嵐先生は初めて自らの“がん” 体験を語る。

ところで、2008年10月、九州で初めての「リレー・フォー・ライフ」が大分で開催された。その場所となったのが本務校の運動場だった。その時、運営委員長として大分大会を企画、開

催されたのが坂下千端子さん。筆者が担当する講座でゲスト・スピーカーとして講演して下さったのだった。1966

年大分県生まれの医師で、米国で研修中の2005年、39歳で“がん”が見つかる。2度の再発後も、医師と患者の両方の立場の経験を生かして“がん”患者さんの支援活動に取りくんでいる。本務校の当時の大学1年生に、「命の主人公は自分自身よ!」というメッセージを力強く語って下さったことを記憶している。その時期に、五十嵐先生も“がん”を宣告されていたのだなと思うと、不思議な気もする。

今年3月26日、「日本がん治っちゃったよ協会」主催イベント『「がん治っちゃったよ! 全員集合!」 in 大分』で、再び、元気な坂下先生の話聴く機会を得た。2015年12月に乳がんで全摘手術を体験した友人に教えてもらったの参加だった。そして坂下先生はここでも、「病気を治すのは、あなたよ! 最高責任者は



あなた！」というメッセージを繰り返していた。

本書でも、五十嵐先生は、「自己決定権」の重要性を強く主張されていたように思う。「形式的には、自分では意思表示しているようであるけれども、ほかの選択肢をもってはいけないような気がした」と、語っている。「“おっぱい修理工場のベルトコンベア” に乗せられているような気分でした」という言葉が特に印象に残った。説明は家族が同伴ということだったが、「家族とはいえなぜ無条件で、しかも同時に私の身体の情報が知らされてしまうのか」と。病院側のリスク管理の一環で医療訴訟を避けるための方法なのだろうが、五十嵐先生は、「自分のことは自分で決めたい」という意思を貫き、「医師を全面的に信頼し、何があっても医師に不利益をもたらす行為は一切しない」という同意書まで作る。“がん” であれ、どんな病気

であれ、治療を受けるか受けないか、治療を受けるとしたらどのような選択肢があるのか、その選択決定権は誰にあるのか、現在の日本の医療の実態を見ていると、その決定権は医療従事者にあるように思えてならないというのが、私の感想である。そんな思いも含めて、体験者サイドが自分の思いを語る、語り合う、さらに、体験者と医療従事者が対等に語り合うというコミュニケーションにまでいけることが理想であると私は考えている。

本書は、辛い思いもし、語ることをためらってきた五十嵐先生が自分の思いを語ったことと、“がん”体験者同士で語り合い（ダイアログ）が出来たということで、先生ご自身へのギフトとなったはずだが、それは同時に読者一人ひとりへのギフトでもある。五十嵐先生の勇気に感謝！ ありがとうございます。

目次

Monologue

告知 35歳以上独身＝ハイリスク	伊勢みずほ
ステージⅡb、転移あり	五十嵐紀子
治療〈1〉【手術】生きるための選択	伊勢みずほ
【術前化学療法】もう、鏡は見たくない	五十嵐紀子
治療〈2〉【化学療法】希望の部屋“化学療法室”	伊勢みずほ
【手術】私の選択、「何があっても訴えません」	五十嵐紀子
治療〈3〉【化学療法】衰弱、破壊、変わらず“不元気”	伊勢みずほ
【放射線治療・ホルモン療法】卵巣、取ってください	五十嵐紀子
日常 見ていたけれど、見えなかった世界	伊勢みずほ
語る勇気、語り合うよろこび	五十嵐紀子

Dialogue

対談「がん」を語り合おう	伊勢みずほ×五十嵐紀子
--------------	-------------

5)支部会員の紹介

①新支部会員： 江頭 万里子
(長崎女子短期大学)



このたび日本コミュニケーション学会に入会し、九州支部に所属させていただくことになりました江頭万里子と申します。私は、長崎女子短期大学で秘書やマナーに関する科目を担当しております。大学や大学院でコミュニケーション学を専門に学んだ者ではありません。

私がコミュニケーションに興味をもったのは、ある大学で就職面接のマナー講座を担当したのがきっかけです。事前に希望者を募り、3人の学生に非言語コミュニケーションを中心に面接指導を行いました(2時間を2回)。本人の許可を得てその様子をビデオ撮影し、志願者の非言語行動の変化で印象がどのように変化するかをマナー講座の受講者に観てもらいました。受講者(大学生84人)に対して行ったアンケートでは、97.6%の学生が指導を受けた学生の印象が良くなったと答えました。印象が良くなった要因は、モデルによって多少の違いはあるものの、受講生のおよそ25%が視線の変化、およそ60%が姿勢の変化と答えました。この経験から、非言語行動が印象形成に与える影響に興味が深まりました。

2012年には、志願者の姿勢とアイコンタクトに着目し、就職面接の最初の自己紹介を想定したビデオ(音声なし)を撮影し、背筋が伸びているか否か、アイコンタクトがあるか否かを

組み合わせた4つのパターンの映像を見て、林(1978)の特性形容詞尺度と野中・沼及・井上(2010)の使用した尺度を用い、モデル(20代の大学生男女)の印象評価を行う被験者を大学生(75人)とした実験を行いました。この実験から、志願者が背筋を伸ばしているか否か、アイコンタクトをとるか否かが、女性モデルの「個人的親しみやすさ」、男性モデルの「社会的望ましさ」、「力本性」、「地位性」の尺度で、すべての実験条件において志願者の印象評価に影響を及ぼしていることがわかりました。また、実験では、尺度によって違いはあるものの、背筋は余り伸ばさなくとも面接者に視線を向けるとおおむね高い印象評価を得ることができるという結果となりました。特にプラスの影響を受けた尺度は、女性モデルの「個人的親しみやすさ」「力本性」「地位性」、男性モデルの「個人的親しみやすさ」「力本性」「地位性」でした。

被験者が、人事担当者だったらどのような結果になるのか。面接時に一番見える志願者の顔からの情報である表情(笑顔)、視線、うなずきが志願者の印象形成に影響を与える可能性は高いと考え、この3点に絞って採用面接の場面での志願者の非言語行動が志願者の印象形成へ与える影響を企業等の人事担当者を対象

に実験を行うことにより探り、その結果を6月の年次大会で報告させていただきました。

コミュニケーション研究は、まだ始めたばかり

です。九州支部会員の皆様、どうぞよろしく
お願いいたします。

5)支部会員の紹介

②新支部会員： 山上 登美子
(日本大学)
※関東支部から異動



2015年12月に関東支部から九州支部に異動しました。本務校は千葉県にあるので、しばらくは関東と九州の往復になると思いますが、将来的には鹿児島県への移住の可能性を検討中です。今年94歳の誕生日を迎えた私の母は、鹿児島市谷山の出身です。これまで時々帰省し、幼少時にお世話になった親戚や知り合いの方々とお会いするのを楽しみにしてきました。最近九州の思い出話をする機会が増え、しきりに

「故郷でゆっくり過ごしたい。」と話しています。母一人では飛行機での往復も心配で、歩行中にバランスをくずして転倒する危険があるので、姉、弟、妹にも協力してもらい、時期を分けて帰省することも検討しています。母が元気なうちに少しでも長く、九州で暮らせるようにしたいと兄弟姉妹で話し合っています。九州支部の皆様、今後ともよろしく願い申し上げます。

5)支部会員の紹介

③所属の異動： 横溝 彰彦
(久留米工業高等専門学校)
※純心中学校・純心女子高等学校から異動



十年間勤めた高校を退職し、一昨年度に故郷の福岡県久留米市にある久留米工業高等専門学校に転職しました。転職のきっかけですが、3年間持ち上がりで関わってきた高3担任の夏に「この子たちが卒業した後に、自

分はこの学校に残るのか・・・」と一抹の寂しさを覚え、「それならば、いっそ自分も卒業してみるか」とふと目に留まった久留米高専の公募にダメ元で応募したところ、幸運にも採用していただいたという次第です。

地元ということもあり、「何ばしよっとか。そいじゃあ、いかんめえもん」と地の言葉を使って説教できますし、故郷の若者の教育に携わることができるのは嬉しいことです。女子 100%の学校から男子 80%の学校へ移りましたので男子学生とのやり取りに戸惑うこともあり、女子学生と話す時には何だか少しほっとする自分がいます。

現在の研究テーマですが、「コミュニケーション」という言葉や関連分野の用語が学校教育のなかでどのように使用されているのかに興味をもち、様々な教科について調べているところです。教育だけでなく、研究にも力を入れていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

6)編集後記 横溝 彰彦 (久留米工業高等専門学校)

以前はホームページを担当させていただきましたが、今号からニューズレターの編集を拝命いたしました。今まで何気なく読んでいたニューズレターですが、自分が編集に携わることになり、発行までに約4ヶ月もの時間が費やされていることを知り、これまで担当してくださった先生方への感謝の気持ちを新たにしました。

兎にも角にも、内容がなければニューズレターは編集も発行もできません。原稿依頼を

快く引き受けてくださった皆様に感謝申し上げます。

読んでくださる会員の皆様がいなければこのニューズレターは不要となってしまいますので、会員の皆様がどのような内容ならば喜んで読んでくださるのか検討して、より良いものにしていきたいと思えます。SNSなど他の媒体が代わりとなるまで、このニューズレターが会員の皆様をつなぐ架け橋となりますように。

発行元：

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

立命館アジア太平洋大学 教育開発学修支援センター 筒井久美子

電話：0977-78-1111 メール：kyushu@caj1971.com

URL： <http://www.caj1971.com/~kyushu/>
